



特集

発想や構想の力を 育てる

生徒たちの「発想や構想の能力」を伸ばすために、どのような手立てが考えられるでしょうか。今回は、小さなスケッチブックを生徒たちに持たせ、そこから発想させたり、構想を練らせたりしている、鈴野江里先生の授業をご紹介します。

撮影 鈴木俊介

授業レポート

「今の私」を表現しよう!

神奈川県鎌倉市立岩瀬中学校

鈴野江里^{すずのえり}先生 × 1年1組 (生徒数 34名)

「発想ノート」と名付けられたB6判のスケッチブック。鎌倉市立岩瀬中学校の生徒たちは、必ずこの小さなノートを携えて、美術室へやってくる。

発想ノートは、生徒が日常生活の中で自分が「美しい」と感じたものを記録したり、作品制作のアイデアをかき留めたりするノートだ。

鈴野先生は、生徒たちに作品の主題を考えさせたいとき、表現の構想を練らせたいときなどに、適宜、このノートを活用する。

今回の授業でも、もちろん発想ノートを使う。題材は、「『今の私』を表現しよう!」。中学1年生の3学期に、今の自分を見つめ、自分自身を抽象的な立体作品として表現するという内容だ。

先生はまず、冬休み前に「発想ノートに、『私を構成するもの』を集めよう」という課題を出した。3学期最初の授業は、集めてきたものについて交流することから始まる。

第1時 私って何だろう

「みなさん、冬休みに『私を構成するもの』を発想ノートに集めてきてくれましたよね? どんなものを集めてきたのか、今日はその報告会をします。まず4人グループで、報告し合ってください。話を聞いてわからないことがあったら、どんどん質問

してね。ではスタート!」

先生が元気よく切り出すと、生徒たちは、分厚くなった発想ノートを広げ、順に報告していく。

部活のユニフォームやシューズの写真や、グラウンドや図書館など自分のお気に入りの場所の写真を貼っている生徒、好きな食べ物や色などの「好きなもの」をリストのように集めている生徒、家族や友達など、自分の周りの人たちをマッピング形式でまとめている生徒など、発想ノートには、さまざまな「私を構成するもの」が集めら



「『発想ノート』に集めたものを報告し合ひましよう」と鈴野先生。

れている。

生徒たちは「何これ? すごいね」「かわいい!」などと、盛り上がり、身を乗り出して友達の報告に聞き入っている。中にはそれぞれのノートを交換して見せ合うグループも。

先生は「友達の報告を聞いてどうでしたか? 自分がノートに集めたものを、ちょっと分析してみましょうか。自分はどういうものに惹かれるのか、集めたものに共通点はあるのか……とかね。それで、自分ってどんな人なんだろう、って考えてみてほしい。次の時間から、制作に入りますよ」と告げた。



「発想ノート」を見せ合う生徒たち。好きな食べ物、部活の仲間、家で飼っている犬など、生徒たちは思い思いの「私を構成するもの」を集めてきた。

第2時 見えないものを形にする

「これから、『今の私』を、紙粘土を使って表現してもらいます。みんなはもうすぐ2年生になりますね。きっと期待や不安があることでしょう。でも、期待や不安な気持ちって、もっと成長したいとか、よりよく生きたいっていう表れなんだと思うよ。そういう今の気持ちや、前の時間で『自分ってどんな人なんだろう』と考えたことなどをふまえて、『今の私』を表現してみよう」。

先生はそう切り出し、紙粘土を配付した。生徒たちはさっそく袋から取り出し、こねたり、伸ばしたりしている。

「じゃあ、まずみんなで『悲しい気持ち』をつくってみよう」と先生が言うと、生徒たちは、涙のしずくや、



粘土の可塑性を楽しみながら、形を考える生徒も。

ハートに穴が空いたマーク、「悲」という文字などをつくり始める。

先生は、いったん手を止めさせ、「マークや文字をつくっている人が多いけど、どう思う？」と問いかけた。すると、ある生徒が「自分で感じた『悲しい気持ち』ではないんじゃないか」とつぶやいた。

「すごくいいことを言ってくれたね。マークや文字をそのまま形にするのではなく、『目に見えない』自分の気持ちを形にするんだよ」と先生が言うと、生徒たちはちょっと困ったような表情を浮かべる。

「難しいかもしれないけど、今の気持ち、今の私を形にしてみたい。発想ノートに思ったことを書いたり、粘土をさわったりしながら考えてみ

よう」と、続けた。

生徒たちは「うーん、難しい……」「どうしよう」と言いながら、発想ノートを見返したり、粘土をさまざまな形に変えたりしながら、「今の私」を表現しようと模索している。

授業の最後には、相互鑑賞の時間が設けられ、生徒たちは、自分の作品を机に置き、教室内を自由に動き回った。「今の私」を形にするという難題を突き付けられた生徒たちは、他の人がどのような形をつくらしているのか興味津々。友達の作品を真剣な表情でのぞき込んでいる。

先生が何人かの生徒に、どうしてその形をつくったのか、皆の前で発表させたところで、終業のチャイムが鳴った。



制作途中で、何度も相互鑑賞の時間が設けられた。

指導計画

準備するもの 生徒：筆記具、発想ノート

教師：紙粘土、粘土板、アクリル絵の具、デジタルカメラ、ワークシート、書画カメラ、電子黒板

学習目標

- 自分の発想ノートや他者の作品などから感じ取ったことや想像したことをもとに主題を生み出し、構想を練ることができる。
- 主題を表現するために、形や色を工夫して作品を制作することができる。

評価規準

- 今の自分を表現することに関心をもち、主体的に構想を練ったり、画材を生かして使おうとしたりしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 自身が置かれている環境や中学校生活での出来事等を見つめて、感じたことや想像したことをもとに、どう表現するか構想を練っている。(発想や構想の能力)
- 意図に応じて画材を生かし、創意工夫して表現している。(創造的な技能)
- 他者の作品から意図や表現の工夫などを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げている。(鑑賞の能力)

授業展開(全7時間) 生徒の活動

第1時【導入】

冬休みの課題(発想ノートに「私を構成するもの」を集める)を交流し、今の自分を見つめる。

第2~6時【制作】

- 発想ノートを振り返ったり、相互鑑賞したりする中で、どのような「今の私」を表現するか構想を練る。
- 「今の私」を表現するため、形や色を工夫して制作する。

第7時【鑑賞】

他者の作品を鑑賞して、そのよさを味わう。また、作者の意図を聞き、自分の見方や感じ方との違いを知る。

第3~5時 「私の形」を探る

授業の冒頭で、先生はグループに1台ずつデジタルカメラを渡した。

「引き続き『私の形』を考えていてほしいと思います。キーワードは『つくり、つくりかえ、つくる』。この形を残しておきたい、と思ったら、カメラで撮影してください。そして、またつくりかえる。どうやってつくりかえれば、『今の私』の形になるんだろう。難しいことだけど、これから3時間、『私の形』を探して行ってください。その後、色を塗って作品を完成させますよ」。

先生がそう告げるやいなや、生徒たちは粘土をこね始めた。粘土を伸



粘土でつくった「私の形」をデジカメで撮影。

ばしたり広げたりする中で、自分の気持ちにフィットする形を見つける生徒もいれば、発想ノートにアイデアスケッチを描き、計画を立てて形をつくっていく生徒もいる。

撮った写真は、先生にプリントアウトしてもらい、発想ノートに貼り付け、改善点などを記入する。1時間のうちに、試行錯誤しながら何枚も写真を撮る生徒がいる一方で、じっくりと一つの形をつくりあげ、「これだ」と思う写真を1枚しか撮らない生徒もいる。発想ノートを見ると、生徒たちの「私の形」を探るプロセスがわかり、興味深い。例えば、Aさん。彼女は最初、さまざまな感情をそれぞれ独立した形としてつくり、配置していた。しかし、試行錯誤の末、最終的には大きなニューロンのような形をつくった(左写真参照)。

授業の中では、適宜、相互鑑賞の



中には「吹き流し」で色をつける生徒も。

時間が設けられる。それによって、生徒は友達の形からも影響を受けながら、自分の表現を探っていった。

第6時 「私」ってどんな色?

本時から着彩に入る。

「どんな色をどう塗ったら、『今の私』を表せるかな。発想ノートに試し塗りをしながら考えてみよう」。

鈴野先生はあえて、絵の具の色数をたくさん与えない。生徒たちは、混色のしかたを工夫する中で、「自分の色」を見つけていく。

また、それぞれに塗り方にも工夫を凝らしている。ストローで「吹き流し」をしている生徒(Tさん：作品はP10参照)がいたので、どうしてその技法を使ったのか尋ねると、「自分は周りの人たちの気持ちに支えられている。そのさまざまな人の気持ちを吹き流しの線を重ねることで表したかった」と答えた。

次時では、いよいよ完成した作品を全員で鑑賞していく。



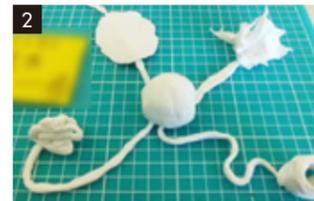
特集
発想や構想の力を育てる

「私の形」の変遷

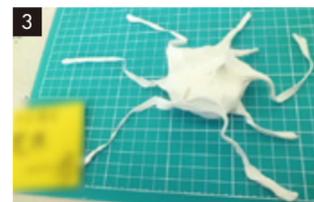
Aさん編



初めは「嬉しい」「寂しい」などの自分の感情を一つずつつくって並べていたが、「何かが違う」と感じていた。



それぞれの感情は関連していると思いき、線でつないだが「感情をつなぐ線がただの『道』に見えてしっくりこなかった」。



中心に「自分」を置き、そこから感情が生まれ、伸びるように表現したら「これだ」と思った。



自分の作品を説明するI君。



I君の作品

第7時 「今の私」を鑑賞する

「今日は、みんなの作品を鑑賞します。いろいろな見方があっていいから、自分の見方や感じ方を大事にしてね」。先生はそう投げかけ、最初の10分で相互鑑賞をさせた。

その後、「これから、みんなで一つの作品を鑑賞します。その後に、作者自身にも作品に込めた思いを聞いてみようと思います」と言い、書画カメラで、I君の作品（上写真参照）を電子黒板に映し出した。

先生「この作品、どう感じた？」

生徒1「壺みたい」

生徒2「外は明るい色だからうれしい気持ち、中は暗い色だから悲しい気持ちを表していると思う」

生徒3「外から見たら明るいんだけど、本当は暗い気持ちをもっている」
先生「それは色だけで感じたことなの？ 形からも感じたの？」

生徒3「形からも感じました。こういう形（両手でチューリップのような形をつくる）で、横からは中が見えないようになってるから」

先生「何か隠されている感じがしたんだ」

生徒4「周りの明るい色は、自分がみんなに見せている性格。でも中が暗いから、みんなに見せられないような気持ちをもっている」

先生「なんで、この色にしたんだろう。作者に聞いてみたいよね」

生徒一同「聞きたい！」

みんなの「聞きたいコール」を受け、I君が教壇の前に立った。

I君「僕は、部活や勉強でもう少し積極的に行動したいないつも思っていて。その消極的な気持ちを、この暗い色で表しました。だから、悲しい気持ちではないんです(笑)」

生徒一同 笑い

I君「消極的な気持ちを包んで、新しい気持ちに変えていきたいと思って、包むような形にしました」

先生「さっき、みんなに『暗い気持ちなんじゃないか』って言われていたとき、どう感じた？」

I君「自分以外の人が見たら思うかなど。予想はしていました(笑)」

先生「みんなの見方と作者が考えていたことが違っていて、おもしろいね」

鑑賞者が感じたり考えたりしたことは、必ずしも作者の意図とイコールではない。生徒たちはそのおもしろさも感じ取ることができたことだろう。最後に、授業の締めくくりとして、先生はこう語りかけた。

「目に見えない今の気持ちや今の私を表現するって、難しいことだったと思います。でも、みんなは懸命に考えて、形にしてみました。何もなかったところからアイデアを生み出すって、すごく大事な力なんだよ。その力は、これからのみんなの生活をもっと豊かにしていくと思います」。

生徒たちは、自分の作品を手にしながらか、先生目をまっすぐに見て、深くうなずいていた。

どう表現したら「今の私」になるのかな



特集
発想や構想の力を
育てる



Sさん

粘土をさわる中で、自分に合う表現を見つけていく

Sさんの「発想ノート」



冬休みの課題では、「私を構成するもの」として、部活で使う楽器などを集めた。



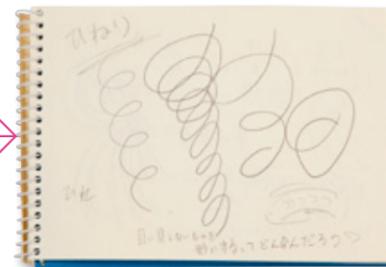
「ぐるぐると考えごとをするのが好き」。そんな自分を、粘土をねじってからませることで表現したいと思い、さまざまなねじり方を試す。



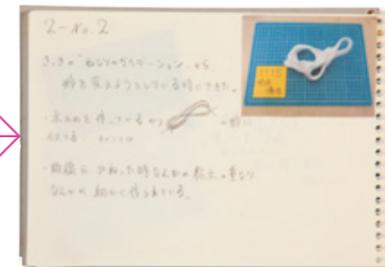
途中で「粘土を伸ばすと繊維が透ける。その感じが今の気持ちに合っている」と思い、伸ばす表現もいろいろ試した。



ねじる、伸ばすという表現を両方使うことに。「考えごとをするのが好きで、ちょっと優柔不断な私」を、ぐるぐるした形と淡い色で表した。



粘土をどうひねれば「今の自分」を表現できるのか。迷いつつ描いたスケッチ。



制作プロセスを丁寧に記録し、次の表現につなげていく。



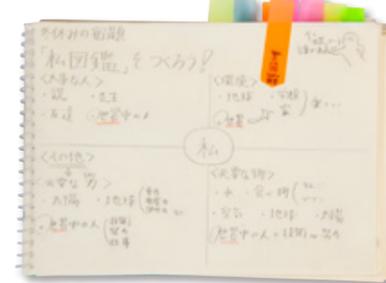
試し塗り。「人に影響されやすい自分をパステルカラーで表したかった」。



N君

ノートにプランを練って、自分を表現していく

N君の「発想ノート」



冬休みの課題では「大事な人」など、自分を構成するものをマッピングで表した。



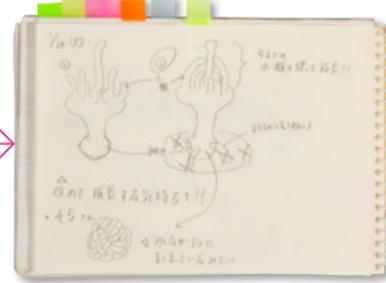
「未熟だけどもっと成長していきたい自分」を表現すると決める。相互鑑賞した後、友達の作品のよい部分を、自分の作品に生かそうとメモ。



発想ノートを見ながら、慎重に色を重ねていく。着彩している途中も、ノートに気づいたことなどをかき留める。



土台のカラフルな部分は「周りの人の支え」を表し、紫の部分は「悩み」、上部分は成長していく自分。先をピンクにして「未来」を表した。



形をどうするか、アイデアを入念にかき留める。まるで作品の設計図のようだ。



試作の中で、作品の先端をつばみのようにして、成長する気持ちを表すことに決めた。



「かすれた色」「グラデーション」など、着彩のプランを、細かくメモする。

※N君の作品をクラス全員で鑑賞したときの模様を、光村図書ウェブサイトに掲載しています。「光村図書ウェブサイト>みつむらweb magazine>美術の授業」

いろいろな「今の私」

Tさん 周りに 支えられている私

自分の人生を表したいと思い、いろいろな道が伸びている形にしました。黄色などの明るい色は、ポジティブな気持ちで、ブルー系はネガティブな気持ち。「吹き流し」の技法を使って、いろいろな色を重ね、たくさんの人たちの気持ちに支えられていることを表しました。

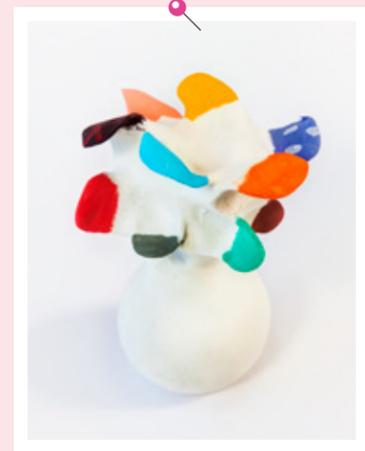


Nさん 表の自分と 裏の自分

周りには明るくふるまっているけど、本当は悩みがあることを、表と裏で表そうと思いました。表は「外向きの自分」で、丸い形にし、明るい色を塗りました。裏は「自分の内面」。悩んでいる気持ちを、粘土をひっぺがってちぎって表し、色も暗めのトーンにしました。

N君 自由に生きたい僕

自由に生きたいという気持ちを表そうと思って、粘土を自由に板の上に広げていきました。すると、所々に穴が空いたので、そこに自分の感情を表現しようと考えました。色は、自由さを表すため白地部分を多く残しました。黄色は喜び、紫色は悩み、赤色は怒りを表しています。



Kさん さまざまな気持ちが 交錯する 未完成な私

土台の部分は「自分の根っこ」。花びらのように広がる突起は、「自分の感情」。オレンジ色は「楽しい」、紫色は「怒り」など、感情をさまざまな色で表現しました。未完成な自分を表すため、土台部分に色をあえて塗らず、白地のままにしています。

授業を終えて 「発想ノート」を活用して

本題材のポイントは、自分という存在を見つめ、表したいものを見つける「主題の生成」にあります。生徒によってはかなり難しく感じるかもしれません。

そこで、前もって自分を見つめる機会（発想ノートに「私を構成するもの」を集める）を与え、主題の生成でつまずく生徒の手立てとしました。適宜、相互鑑賞を取り入れたことも有効だったと思います。

また、生徒たちは、制作途中の作品を写真に撮り、プロセスを発想ノートに残しました。このことも表したい主題をどう具現化すればよいか、構想を練るための助けになったことと思います。

今回、初めてこの題材に取り組んだのですが、指導案を考えるにあたり、多くの先生方からアドバイスをいただきました。生徒たちは相互鑑賞を通して「自分以外の誰かの存在」が自己の活動に大きな影響を与えることを感じたと思いますが、私も、指導案を練っていく際、まさに同じ気持ちでした。

これからも、共に学び共に生きることを生徒が実感できるよう、私も周りの方々のアドバイスを仰ぎながら、授業を考えていきたいと思っています。

鈴野江里 すずの・えり

神奈川県生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒業。鎌倉市立岩瀬中学校教諭。鎌倉市の公立中学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校を経て、2017年4月より現職。



光村図書中学校「美術」の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一 うえの・こういち

大阪府生まれ。「美術による学び研究会」会長。高知大学大学院教育学研究科教授、帝京科学大学教授を務める。『五感をひらく10のレッスン』（美術出版社）、『私の中の自由な美術』、『風神雷神はなぜ笑っているのか』（光村図書）など著書多数。NHK高校講座「芸術（美術）」を監修。光村図書中学校「美術」教科書の著作者でもある。

発想・構想を 可視化する

今回の授業は指導案を作成する段階から関わり、授業の補助もするなどして、楽しく参観させていただきました。

鈴野先生は生徒に、発想ノートを持たせ、「私を構成するもの」を集めようという課題を、冬休みの間に出していました。発想ノートは生徒が主体的に情報を集めたり思索したりするノートで、4月から1年を通じて行われている取り組みです。授業が始まってから「さあ発想しよう」と促すのではなく、発想ノートを通して、日頃から発想のアンテナを鋭敏にしておくことは大切なことです。

授業ではデジタルカメラによる作品撮影と相互鑑賞の活動をお願いしました。

デジタルカメラを使ったのは途中経過を記録するためではありません。今回の授業では粘土を用いるので、つくり、つくりかえる過程を生徒に意識させる必要があることと、変容していく作品の形を見ることを通して、自分の発想・構想のあり方や方向性を省察させるためなのです。いわば発想・構想を可視化して新しいものを生み出す資源として、デジタルカメラを用いたのです。

撮った写真はプリントされ、発想ノートに貼られます。写真を見ながら生徒は自分の表現を振り返るとともに、この後どうすればよいかを考え、スケッチしたりメモを記したりして次の段階に進みます。発想ノートもまた、発想・構想を可視化する資源だと言えるでしょう。

相互鑑賞も、発想・構想を可視化し、表現の手がかりや支援となる活動です。

第2時では見えないものを表す形のイメージが湧かず、粘土をつまみ出したり広げたりしたりして変化を楽しむことに留まる生徒の姿が見られました。そこで相互鑑賞を取り入れました。友達の多様な発想を見ることから、自分にはない発想や表し方を感じ取らせることがねらいです。この後も適宜、相互鑑賞を行い、生徒たちは友達の発想から学びながら自らの発想を磨き、表現を工夫していったのです。

授業は、第6時から着彩に入りました。ここでも相互鑑賞を取り入れましたが、これは発想のためというよりは着彩の方法や技法の多様性を学ぶための鑑賞です。一見、同じように見える鑑賞の活動でも生徒が学ぶ内容は違うので、そのねらいを明確にして指導する必要があります。これらの意図的な鑑賞の活動は、美術科における生徒の表現と、作家の制作活動との差異を明確に示しています。授業の中で生まれる作品とは何か？それは「学びの形」なのです。

粘土を手にとった最初の感覚から始まり、形をつくってはつくりかえ、鑑賞を通して発想や技法の多様性を学び、自分の表現に生かし完成の姿に至るその一連の過程のすべてが、生徒にとっての「学びの形」なのです。



特集
発想や構想の力を
育てる